

立命館大学「チョン語」問題

金 友子

The “Chon-go” Problem at Ritsumeikan University: Unintentional Use of a Racial Slur among Students

KIM Wooja

Abstract

At Ritsumeikan university, a few students use the term “Chon-go” as an abbreviation when referring to the Korean language course, *Chosen-go* (“go” meaning “language”). It is not unusual to abbreviate the name of a language class (e.g., French (*Furansu-go*) is called *Fura-go*), but the “chon” used in the term “Chon-go” is a derogatory term for Korean people. Although the students who say it do not seem to have any discriminatory attitudes, some others find it offensive. This paper discusses how common it is for students to use the word “Chon-go” and why they use it. A survey was conducted as a preliminary study for another full-scale survey to be conducted later, so it has its limitations. Nonetheless, the following conclusions were reached. First, roughly 20-30% of the students were using the term “Chon-go”. Second, the term was used regardless of faculty, year, and/or gender. Third, the users’ favorable or unfavorable feelings toward the Korean language or Korea were not significant. Fourth, some students even in departments not offering Korean language courses also used the term. Fifth, the 4th survey was conducted in 2022 just as in-person classes resumed and from this it was noted that use of the term “Chon-go” had almost disappeared completely. What all these results mainly suggest is that this term has nothing to do with discriminatory attitudes, but is merely student lingo used among peers within the university community. However, the problem remains that the term “chon” is still used in Japanese society today to demean Koreans, and thus, regardless of the intentions of the user, it very potentially hurts recipients and supports a discriminatory society.

1. 問題の所在

三つのエピソードから始めたい。2010年代の初め頃だったのだろうか。大学構内で私の授業を聞いている学生と立ち話をしていた時である。彼の友達を通りがかり、私を指して「誰?」と聞くので、彼は「チョン語の先生」と答えた。私は「チョン語?」と思いつつ、強烈な違和感を覚えたが、その場で口にできなかった。話には聞いていたものの、私が「チョン語」を直接耳にした初めての経験である。

授業後の学生との会話で、ある学生は何の躊躇も気負いもなく、朝鮮語のことを「チョン語」と呼んだ。あまりにも屈託なく口にするので、「チョン」というのは差別的なニュアンスがあることを告げると、「知らなかった。周りもみんな言っているからフツーに言ってた」と周囲を見回し、隣に座っていた学生もそれに頷いた。さらには「“チョン語”ってメール（携帯メール）で打とうと思って“ちょんご”って入力しても全然（漢字に）変換されないから、わざわざ“朝鮮（ちょうせん）”って打って“鮮”を消してる。“朝”ってチョンって読むのかと思ってた」と無邪気に付け加えた。その学生はどうやら「朝語」の読み方が「ちょんご」であると思っていたようだ。朝鮮語が好きで、授業中も熱心で一生懸命に勉強していた学生だった。

とある在日朝鮮人女性の集まりでのこと。立命館大学で学生たちが朝鮮語のことを「チョン語」と呼んでいるという話をした。1980年代くらいに大学に通っていた彼女たちは驚いて口々に「そりゃ、撲滅せなならん」「学生たちは意味を知って言っているのか?」と言った。その反応には怒りがにじんんでいた。ある年代の人々にとっては「チョン」は明らかに差別語として脳裏に刻まれている。

立命館大学で、朝鮮語（科目名）を学生たちが略して言うときに「チョン語」と言っている。言語名を略して言うことは珍しくもなんともなく、英語以外の言語は、フランス語が「フラ語」、ドイツ語は「ドイツ語」、中国語は「チャイ（語）」と呼ばれている。そして朝鮮語は「チョン語」である。朝鮮語（ちょうせんご）の「朝（ちょう）」の字をとって「チョウ語」でもよさそうであるが、「チョン語」と呼ばれているのである。言っている学生たちには差別意識はどうやらなさそうであるが、これを不快とする人もいる。どれくらいの学生が、なぜ「チョン語」と言うようになったのか。その学生たちに差別の意識はあるのか、ないのか。本稿では、大学内の某クラスでおこなった調査をもとに、若干の考察を加えてみたい。

なお、本稿にはいくつかの差別語が登場するので、読んでいて不快になる読者もいると思われるが、それらは検討または論述を目的として言及せざるを得ないということを、あらかじめお断りしておく。

2. 大学機関における朝鮮語教育

2.1. 朝鮮語教育の歴史と現況

まず、大学における朝鮮語教育について概観する¹。戦後日本での朝鮮語（韓国語）教育が

大学で始まったのは1950年に天理大学文学部に朝鮮語・朝鮮文学科（後に外国語学部に変更）が設置されてからである²。その後、1976年に国立大学としては初めて大阪外国語大学が朝鮮語学科を設置した³。1970年代になっても一部朝鮮語を専攻として提供している外国語大学を除けば、朝鮮語教育を提供していた大学はわずか8校であった⁴。

しかし1984年にNHKがラジオおよびテレビで「アンニョンハシムニカ？ハンゲル講座」を放映し始め⁵、また、1988年のソウルオリンピックを前後して始まった一時的な韓国（語）ブームなどにより、韓国に対する一般市民の関心が高まるとともに当該地域の言語への関心も高まっていった。90年代後半になると、映画や音楽など韓国の大衆文化が日本に紹介され、日本から韓国への渡航者数も急増するなど、日韓の交流が増加していく。2001年には大学入試センター試験の外国語科目として「韓国語」が採用され⁶、2002年の「日韓ワールドカップ」や、2003年にNHKで放送された韓国ドラマの「冬のソナタ」、2004年の「東方神起」の日本での活動など韓流ブームが起こる。とりわけK-POPは若者の中で「韓国音楽」というよりはポップソングの一つのジャンルとしてすでに定着したとあってよく、これらの人気をもとに朝鮮語学習者が増加した。たとえば、NHK講座のテキスト発行部数を見ると、2001年に8万部だったのが、2005年以降、テレビ22万部、ラジオ10万部で計32万部と大幅に増えている⁷。

以上を背景に、大学という特殊な場で朝鮮語学習者の増加を後押ししているのは、グローバル化と、国際社会に適応できる人材育成という教育目標である。そのための言語教育、特に「外国語教育」の重要性に対する認識が一層高まっている。日本の大学⁸では「第一外国語」として不動の地位にある英語のほかに、伝統的にドイツ語、フランス語が「第二外国語」として設置されていたが、「外国語教育の多様化」が提唱されるなかで、様々な外国語が教育されるようになってきた。大学ごとに差異はあるが、現在、第二外国語として設置されている主な言語は中国語、フランス語、ドイツ語、朝鮮語、スペイン語、ロシア語、イタリア語等である。2013年現在で、上記の「第二外国語」のうち朝鮮語の実施率は4番目に多い。

文部科学省の「大学における教育内容等の改革状況について」をみると、大学での朝鮮語科目の実施状況の変化とその増加趨勢がわかる⁹。2013年度調査によれば、全国の大学のうち「韓国語・朝鮮語」を設置しているのは474校で、64.2%にあたる¹⁰。1995年度における朝鮮語教育実施校は143校（25.3%）に過ぎなかったが、それが6年後の2001年度には298校（42.5%）に増え、約2倍の増加率を見せている。2004年度には369校（52.1%）の大学、つまり半数以上で朝鮮語教育が実施されている。それ以降は急激な増加の様相は見られないが、2007年度の実施校は431校（58.0%）に増え、2011年度の実施校は451校（59.5%）とさらに若干増えている。2020年度調査では「韓国・朝鮮語」を設置しているのは466校、62.1%を示している¹¹。このように、日本における朝鮮語教育は年々拡大の傾向にある。また、他の外国語と比較しても最も顕著な増加率を示している。

立命館大学は1994年から第二外国語（初修語）として朝鮮語を開講した。科目名は「朝鮮語」で、開講当初から現在も変えていない。当時の受講生は約170名だった。2014年度には1回生履修者約470名となり、その後大幅に増加し、2022年の1回生履修者は800名を超えるに至っ

ている。全学部のうち朝鮮語が開講されているのは7学部（文・法・産業社会・国際関係・経済・経営・政策科学部¹²⁾）で、人文系では映像学部・総合心理学部、理工系では理工・情報理工・薬学・生命科学部には開講されていない。基本的には1回生春学期から1年間、週3時間（文法が2時間、会話が1時間）を学ぶ¹³⁾。多くの学生は1回生だけで初修語の学習を終えるが、その後も学習を続ける学生もいる。文学部では希望者は2回生に「応用」科目を履修することができる。2004年には「副専攻」のなかに朝鮮語コミュニケーションコースが開講された。「副専攻」とは、専門科目の履修と併行して、学部専門分野以外の学問領域についての力量を培っていくために、一定のまとまりをもった科目群を履修していく制度である。言語能力を発展させるだけでなく、当該言語使用圏の文化や社会を学ぶことができる。2015年度時点で2～3回生を合わせて約170人が受講していたが、こちらも増加していき、2022年度現在、約300人の学生が履修している。

2.2. 科目名——その多様性と「朝鮮語」という名称

大学での朝鮮語科目名は多様で、朝鮮語、韓国語、韓国・朝鮮語、コリア語、ハングル、ハングル語などが採用されている。国際文化フォーラムの調査（2005年）によると、70年代まではほとんどが「朝鮮語」で、80年代に入ると「韓国語」が多く使われるようになる。「コリア語」が77年、「ハングル」が86年、「韓国・朝鮮語」が91年から使用されている。1995年度では、朝鮮語が39.9%と最も多く、国立大学では朝鮮語が80.0%、公立大学では50.0%を占める一方、韓国語は21.7%である¹⁴⁾。しかし2003年になると、朝鮮語が27.8%に減少し、韓国語が33.1%に増加する。国立・公立・私立のすべてで「韓国語」の科目名を採用する大学が増加している。桂正淑（2005）は、「韓国語」という科目名が多いことについて、「日韓の人的・文化的交流の活性化や韓国語の母語教員の殆どが韓国出身であることから現状「韓国語」という科目名が多く採用されている」と診断している。

日本において朝鮮語をどのように呼ぶのかは、それ自体が議論の対象になってきた。その背景としては、南北分断によって一つの民族が二つの国家に分かれたことにより、言語の名称とそれを主に話す民族／国家の名称も二元化したことがあげられる。「ハングル」や「コリア語」という、朝鮮半島では使われていない言語名が使用されているのは、分断が日本にも持ち込まれており、「韓国」語や「朝鮮」語を使用すると、関連民族団体から批判が出るとの理由から「中立」を標榜するためという背景がある。これに関しては、NHKの講座が「アンニョンハシムニカ・ハングル講座」となった経緯によく表れている。

NHKに朝鮮語の語学講座の開設を要望する市民運動などの動きを受けてNHKは1982年度から「朝鮮語講座」を開設すると決定したが、これが韓国に伝わり、駐日韓国大使館や韓国を支持する民族団体が反発した。「韓国・朝鮮語」や「コリア語」などの案が出たが、結局、「アンニョンハシムニカ?～ハングル講座～」という番組名に決まった。また、この名称問題によって、NHK講座開設以降、番組内では「韓国語」「朝鮮語」、「韓国人」「朝鮮人」という呼称は使用せず、「この言語」「かの国の人」と言った¹⁵⁾。

近年、韓国との人的交流が増え心理的距離が近くなったためか、あるいは実際に教えるのが韓国の標準語だからか、「朝鮮語」「ハングル」の科目名を使用していた大学は「コリア語」「韓国語」に変更している。2002年から大学入試センター試験(2021年度から大学入学共通テスト)に「韓国語」が追加されたが、このときはNHKハングル講座開設の時ほど名称をめぐる議論はなかったようである。このように、「韓国語」が隆盛するなかで、「韓国語」を科目名またはコース名とする大学がその名称について説明することはあまりないが、「朝鮮語」を科目名として用いる大学のほとんどが科目名について説明している。たとえば明治大学では「朝鮮語」と「韓国語」は同じ言語です。明治大学では日本の学問研究の伝統に従って授業科目名として「朝鮮語」を採っていますが、どちらの名前で呼んでも、同じ一つの言語のことです。授業の中でも、「朝鮮語」と言ったり、「韓国語」と言ったりします¹⁶と説明する。京都大学も同じく「朝鮮語とは、主に朝鮮半島で使用されている言語のことです。この言語の主な使用者は大韓民国（韓国）および朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）という2つの国家に所属している人たちです。しかしKoreanは実は朝鮮半島以外にも数多く住んでいますので、この言語を使用する人たちは実は世界中にいることになります。／日本のアカデミズムの世界では、この言語を「朝鮮語」と呼ぶことに決まっていますが、「韓国語」とか「コリア語」などという別の呼び方もあります。呼び方は異なりますが、ほぼ同じ言語を指しています¹⁷としている。立命館大学も同様に「言葉の名称は、朝鮮語のほかに、韓国語、ハングル、コリア語などさまざまですが、立命館大学では、"朝鮮半島"という言い方にあるように地理的、歴史的名称として同地域を指して日本で言い習わされた呼び方にならって朝鮮語としてい¹⁸る。これらの特徴として、「韓国語」も「朝鮮語」も同じ言語を指すが、学術界での慣例にしたがって、あるいは地理的・歴史的名称として「朝鮮（語）」という用語を使用していること、また、朝鮮半島から離散した人々の存在も視野に入れているところが共通している。

科目名を朝鮮語としていても、大学で使われるテキストは言語の名称として「韓国語」を使用している。立命館大学では当初、教員が作成した初級『はじめての朝鮮語』、中級『使いこなす朝鮮語』という教科書を使用していた（『はじめての朝鮮語』は市販されるにあたり『ハングルのとびら』に改称した）。しかし、「朝鮮語」という授業の名称と、実際の言語の名称との使い分け・ずれが存在する。科目名は朝鮮語であるが、テキストで扱っているのはソウルの言葉を標準語とする「韓国語」であり、文法や表記法も韓国で使用されているものに準じている。「朝鮮語」という科目名および言語の名称については、第一回目の授業でハングルについて説明する際に教員が話すことになっている。『ハングルのとびら』は、著者による「はじめに」で「本書は、初めて韓国朝鮮語を学ぶ日本人学習者のために作られた教材です」とあり、ハングルについての解説文では「ハングルとは、朝鮮半島で話されている言語（韓国語、朝鮮語、コリア語など様々な名称で呼ばれています。本書では、以下韓国語と称します）の文字の名称です」と解説している。例文でも「学校で韓国語を習っています（학교에서 한국어를 배웁니다）」はあるが「学校で朝鮮語を習っています（학교에서 조선어를 배웁니다）」という文章は見当たらない。

科目名について長々と論じてきたが、これは、本稿の課題である「チョン語」という呼び方に、「朝鮮語（ちょうせんご）」という科目名が関連しているのではないか、という直感からである。実際、「朝鮮語」という科目名を採用する他の大学でも類似の事例が確認されている¹⁹。

3. 「チョン」という差別語

3.1. 差別語の研究と朝鮮に関連する差別語

差別語に関する研究は以下の三つの方向性で進められてきた。①主に社会学、なかでも少数者に関心をもち差別撤廃を目指す活動とともに行われてきたもの、②法学、表現の自由との関連を論じたもの、③メディア研究、マスメディアにおける使用禁止用語や検閲について議論するものである。そこでは、個々の差別語の歴史に加えて、何が差別語になるのか、差別語はどのように言い換えられるのか、また、差別語を使わなければそれでいいのか、などが論じられてきた。とりわけ部落解放闘争のなかでは全国水平社創立時（1922年）から一貫して差別・侮蔑的な名指しは糾弾するとして、差別表現糾弾闘争は特に70年代から差別糾弾闘争の重要な一部として取り組まれていた。さらに80年代になると、女性や民族的マイノリティに対する人権運動が盛り上がるなかで、日常生活や文学やマスメディアにおける差別語に対する糾弾運動が各地で行なわれた。90年代になると「ポリティカル・コレクトネス」という用語が紹介されもした。差別表現がハラスメントとして問題化されたのは、女性に対する表現だった。「結婚しないの？」などの発言がハラスメントと見做され、また、性別役割を前提とし固定化する表現の言い換え（保母→保育士）や、女性がその職につくのは特別とみなされるような表現（女医、女性作家）が問題提起された。

民族・人種の領域に関しては内海愛子他編『朝鮮人差別と言葉』（1986）が、運動を展開していくなかで差別語の差別語たるゆえんを明らかにする必要性に迫られた（「あとがき」より）と、執筆の背景を明らかにしている。同書およびそれ以前に出された明石書店編集部『朝鮮にかかわる差別表現論』（初版1984年、新版1992年、本稿では新版を参照）は、新版刊行理由として相変わらず差別語が多く出版物等で散見されると述べている。これらのことから、90年代初めまで、マスメディアで差別語が使用されることはそれほど珍しくなかったと推測される。両書ともに具体的な事例を紹介しつつ、糾弾する側・される側の間でどのようなやりとりがあったのかが詳細に記録されている。主に取り上げられている差別語は、（不逞）鮮人、北鮮、南鮮などである²⁰。

「鮮人（せんじん）」「南鮮（なんせん）」「北鮮（ほくせん）」など、朝鮮の「鮮（せん）」のみをとって貶めて表現するものは、植民地時代の遺物である²¹。たとえば『朝日新聞』は1982年に「歌壇」で、「北鮮」という言葉を使用した短歌を秀作として二度も掲載した²²。高校で副教材として使用されている『世界史年表』『地図』には、「鮮」「北鮮」という語が記述されていたことが判明し、1983年に東京の高校の社会科教師が問題視して、5つの出版社に抗議し、訂正を要求した²³。

3.2. チョーセンとチョン

「チョン」という差別語に関してはあまり研究文献がない。それは、北鮮・南鮮や第三人がテレビや新聞、雑誌といった公的な場で使用されてきたのに対して、「チョン」は俗語、すなわち広い範囲で用いられてはいるが標準語法からははずれているとみなされる口語表現だからであろう。

『広辞苑』によると「ちょん」は①たやすく物を切るさま。②拍子木の音。また、芝居の幕切れに拍子木を打つことから、物事の終了。③しるしに打つ点。ちょぼ。④おろかな者、取るに足りない者としてあざけりに使う語である。語義上は朝鮮ないし朝鮮人を指す言葉ではない。しかし上記④の用例から転じて、朝鮮人を表す蔑称「チョンコ」「チョン公」などと同一視されて使用されたという説がある。上原善広（2011）によれば、「チョンコ」は「在日朝鮮・韓国人」を指す呼称で、主に関西地方で使われたという。語源は朝公（チョウコー）²⁴から来ているとされているが、諸説あり正確な語源は不明である。加えて、上に述べたように、「チョン」という言葉自体に昔からネガティブな意味があったため、朝鮮の「朝（ちょう）」をチョンと発音した可能性を示唆している。また、本来は朝鮮人に対する差別性をもって使用されていたものではなかった「チョン」という言葉が、朝鮮民族を日本人が見下す意図でもちいられるようになり、「いまなお、在日コリアンにとって、「体を凍りつかせる」差別語として生きつづけているとして、その例に「チョン公」「チョン校（朝鮮高校）」「チョン靴（朝靴）」を挙げている。

鈴木啓介の「「チョーセン」「チョン」について」（内海愛子他編、1986に所収）は、ほとんど唯一のまとまった論考である。鈴木は東京で高校の教員として教育現場に関わってきた。「チョーセン」「チョン」と言った差別語が小中学生のころから平然と使われているとして、学生の作文を紹介している。一つは高校三年生が1986年に書いたもので、中学時代に通学途中で出会う朝鮮学校の生徒について友人が「チョンジン」だと教えてくれると同時に「目が合うと顔を剃刀で切られてしまう」と言っていたことを回想している²⁵。また、別の学生（在日三世、韓国籍で母は日本人）は、朝鮮人に対する差別に怒りを表しつつ「みんなは“きたない”とか“みじめ”とか勝手なこと言います。げんにあたしも他人事のように平気で、朝鮮高校に対してでも“チョン”のくせに——なんて思うんです」と自らの差別意識を反省する²⁶。1年生（1983年）の学生は、近所のおじさんが、朝鮮人は怖い人だと言っていたことを疑いもせず、自分の近所の子供たちといっしょに「チョンだ！チョンだ！」とバカにしていたと述べている²⁷。

鈴木によれば、高校生の中で最も多く使用される差別語が「チョーセン」「チョン」であり、「チョン」という言葉を耳にすることが圧倒的に多い。例として「チョンコウ」（朝鮮高校のこと）、「チョンバッグ²⁸」「チョン靴²⁹」などである。1981年に鈴木が勤務校で実施したアンケートによると、「問10 日本人の若い人たちの間で、朝鮮人のことを「チョン」と呼ぶことがあります。①あなたはこの言葉を使ったことがありますか」との質問には「ある」が71%（701名）、「ない」が18%（182名）、「思い出せない」が5%（45名）で、圧倒的多数が使用していることがわかる。また、「②“チョン”ということばについてあなたはどのように考えますか」という問いに対しては、「1. 相手を軽蔑した言い方だと思う」が34%（338名）、「2. 略した言い方で軽蔑

した言い方ではないと思う」が38% (382名) で拮抗しているが、「軽蔑した言い方ではない」と考える学生の方が若干多い。鈴木は、使ったことがないと答えた学生が20%以下であることと「侮蔑感の濃い、明白に朝鮮人を差別することば」であるにも拘わらず半数以上が差別語ではないと答えていることに深刻な問題を感じている³⁰。しかし、「チョン」という言葉の起源は定かではなく、60年代に入ってから使われ始めたという証言があったことに言及するのみである。高校生がもつ朝鮮人のイメージはほとんどが、同世代の朝鮮人学校の学生とのかかわり（直接的な実体験から、間接的なうわさまで含む）が影響している。朝鮮学校の学生とのトラブルは日常茶飯事であり、直接に体験していなくても「友人や後輩に伝えられていくうちに増幅され、朝鮮人に対する恐怖と軽蔑の感情は、子どもたちの世界に空気のように存在することとなる」³¹。そうした軽蔑の感情が、「チョン」という差別表現に転じたのではないだろうか。河明生³²は、ネット小説で「オレの母校・朝鮮高校、略して朝高（チョーゴ）」「オレ達のことを敵意ある日本人は、／ーチョン高／と蔑称していた」と記述している³³。

以上のことから、「チョン」は①1960年代から朝鮮または朝鮮人を指す言葉として使われるようになった、②本来の意味は異なるが、朝鮮人を侮蔑する差別表現である、といえる。チョンという言葉は依然、差別語・侮蔑語として使用されている。その主な空間がインターネットである。検索すれば、単に「チョン」だとか「在日チョン」などといった言葉が山のように出てくる。しかし「チョン語」という名称は検索してもそれほど出てこない³⁴。

4. 調査結果——散発的な予備調査をもとに

4.1. 調査概要

学生たちが「チョン語」と呼ぶことが気になりだした私は、これまで数回にわたってこの語の使用状況を調査してきた。調査といっても、全学規模で実施したわけではなく、自分が担当する講義のうち一つで、2014年から2015年の間に計三回、設問調査を行ったのみである。当該クラスは朝鮮語の単位を落とした学生が履修する、いわゆる「再履修」クラス（現在の「単位回復」科目、以下「単位回復」を使用）で、文学部・産業社会学部・法学部の学生を対象に開講されている。受講生数は変動があるが毎年20～30人で、学年は1～4年生以上である³⁵。単位回復科目全体の傾向として、学生の授業への熱意は極めて低く、このクラスでも例外ではない。講義を担当し始めた当初から学生の朝鮮語に関する関心や、なぜ単位を落としたのかなど、学生の動向を知るためにアンケートをとっていたのだが、これに「チョン語」に関する質問項目を加えた。学生個々の学習傾向等を知ることが目的であったため、調査は記名式である。以下に質問内容を記載しておく。本稿に関連する質問は「Q9 友人や先輩・後輩などのあいだで朝鮮語（授業名）を略して何と言いますか？」である。なお、本設問は前述したように「気になった」ことを契機に始めたもので、その後にもしかしたら本格的な調査を設計・実施するための予備的な調査にでもなれば、という目論見のもとに加えたにすぎない。したがって、調査としては不十分であることを重々承知の上で紹介したい。

質問項目

- Q1 1回生のとき、なぜ朝鮮語をとろうと思ったのですか？
- Q2 朝鮮語は好きですか？
- Q3 Q2で「はい」と答えた人にお聞きします。好きな理由を教えてください。
- Q4 Q2で「いいえ」と答えた方にお聞きします。好きではない理由を教えてください。
- Q5 これまで、朝鮮語の授業を受けてきてどうでしたか？
- Q6 単位を落とした決定的な理由は何だと思えますか？
- Q7 朝鮮語文化圏（韓国・北朝鮮、その他）のどのようなことに関心がありますか？
- Q8 朝鮮語で言ってみたいセリフを一言書いてください。
- Q9 友人や先輩・後輩などのあいで朝鮮語（授業名）を略して何と言いますか？
- Q10 授業に対する要望があれば書いてください。
- Q11 食べたことのある韓国料理・食品を書いてください。
- Q12 バイトをしていますか？ していたら、どんなバイトをしているか書いてください。

4.2. 調査結果

2014年春学期の調査では、回答者20人のうち「朝鮮語（略さない）」5名、「なし」2名、「ハングル」3名、「韓語」1名、「韓国語」2名、「朝鮮」1名で、「チョン語」に関連するものは、「チョン語」5名であった。うち一人は自称K-pop好きの学生で「ちょんご ちょんご ちょんご〜♡」と愛着を示すように書いていた。さらに「たまにちょんごというひとがいる」との記述もあった。2014年秋学期（19名）には「チョン語」と回答したのは6人で、うち一人は「ちょん語？」とクエスチョンマークがついていた。そのほかに「朝鮮。友人はチョン語って言っていました」との記述もあった。残りは「韓国語」「朝鮮語」「ハングル」「朝語」（おそらく「チョウゴ」）、「略さない」であった。2015年春学期は28名中11名が「チョン語」と回答した。その他は「朝鮮語」「韓国語」「ハングル」など上記と似た回答だった。4人に一人、または3人に一人強が「チョン語」と呼んでいるという結果である。回答に学部・学年・性別の偏りは見られなかった。科目の性質上、朝鮮語が不得手か苦手、または苦手になった学生がほとんどであるが、朝鮮語が「嫌い」である学生はごく少数で、「チョン語」という用語の使用とは関係が見られなかった。また、全般的に韓国または朝鮮に対する嫌悪も見られなかった。

朝鮮語が開講されていない他学部の学生はどうか。理工系の学生が受講している教養科目「東アジアと朝鮮半島」で、無記名式、任意で答えるとして「朝鮮語（立命館の科目名）を略して何と言いますか？」と聞いた（2015年秋学期実施）。有効回答数62名のうち、24人が「略さない」（そのまま「朝鮮語」）で圧倒的に多く、「チョン語」11名、「チョン語と言うのを聞いたことがある」6名だった。その他「ハングル」「韓国語」などがあり「口にしない（言ったことがない）」というものもあった。

以上の結果から、次のようなことが言える。第一に、おおむね 20～30% の学生が使用している。第二に、学部・学年・性別に拘わらず使用している。第三に、朝鮮語ないし韓国・朝鮮に対する好悪感情はあまり関係がない。第四に、開講されていない学部でも使用する学生がいる。

5. おわりに——若干の考察

調査を始めた時、単位回復クラスを選んだのは、そもそも受講生にアンケートを取っていたので「ついでに」という理由もあるが、朝鮮語に否定的な感情、もしくは少なくとも「好き」ではない学生が多いだろうと予想したからであり、この語のある程度の使用を見込んだからであった。これには「チョン語」と呼ぶ学生は朝鮮語（あるいは朝鮮）が好きではないだろう、という私の先入見が作用していた。しかし結果は予想を裏切るもので、朝鮮語が好きか嫌いかに拘わらず「チョン語」と呼んでいる事実が明らかになった。好悪感情と差別意識は同じものではないが、好感を持っている学生に、朝鮮に対する差別意識はないと仮定すると、彼ら・彼女らは差別や侮蔑の意味を込めて「チョン語」と呼んでいるのではなさそうである。しかしながら、「チョン」が差別的なニュアンスを含む語であることを知っている学生もいる。アンケートをとった授業後に教室に残っていた二人の学生と話をする機会があったのだが、一人の学生は「あまり良くない言葉だと知っているので、自分では使わない。けれども周りは使っている」と語り、それを聞いた別の学生は「えー！ そうなの？ 知らなかった」と驚いていた。

大学で「チョン語」という呼び方が流通するようになったのがいつ頃なのかはわからない。2001～2005年まで立命館大学に在学し、学内の民族サークルに所属していた知人は、当時、朝鮮語を受講してはいなかったし、直接聞いたことはないが、朝鮮語を「チョン語」と呼ぶ学生が多数いることに対してサークルの中で問題として話題になったことはあると語ってくれた。また、この知人は現在、他大学で朝鮮語の講師をしているのだが、その大学も科目名は「朝鮮語」で、同じ現象がみられると証言した。

ある教員は、数年前に「チョン語」と言っている学生がいたといい、しかしながらその学生は韓国がとても好きで、差別感情は全くなく使っていたように見えた、と証言してくれた。またその際に、違和感と不快感は覚えたものの、それよりも驚きのほうが大きく、「チョン語」の使用については何も言えなかったという。この教員は在日朝鮮人で、「チョン」が差別語であると認識している。「チョン」と名指されればそこに発話者の攻撃性や敵意を見出すことは容易い。しかし「チョン語」の攻撃性は微妙である。攻撃的で敵意に満ちたヘイトスピーチは、受け手（ヘイトのターゲット）を黙らせる「沈黙効果」³⁶をもつと言われているが、この文脈での「チョン語」はそれとは異なる作用していると思われる。自分が教えている学生の口から、思いもしない言葉が飛び出して来たという事実と直面した時、その言葉の受け手は、まず当惑し、善意の解釈をしようとし（悪気はないのだ、というように）、そうこうしている内に会話は進み、反論や問題提起をする機会を逃してしまう。そこで名指される集団に属しているから

といて、あるいはその集団に属しているからこそまさに、教員という立場にもかかわらず、即反応することは困難である（もちろん、後で蒸し返すこともできるが）。

2022年の春学期と秋学期に、久々に調査を実施してみた。質問内容は先述と同じである。結果、「チョン語」を使用しているのは春学期0名、秋学期1名であった（どちらも約25人中）。秋学期の1名は4回生であった。「チョン語」は消えたのかもしれない。この間に起こった大きな変化といえば、新型コロナウイルスの大流行と、その感染防止のための授業のオンライン化であった。これにより学生間のつながりは縦にも横にも遮断された。数件あった「(科目名を)そもそも口にしない」という回答がそれを端的に表している。ここから言えるのは、「チョン語」はある種の業界用語として使用されているだけである、という仮説である。大学内で授業を略称することはよくあることで、例えば「フランス語」を「フラ語」、「近代経済学入門」を「近経」、「キリスト教学」を「キリ教」と呼んだりする。たいていは入学後に先輩がそう呼んでいるのを聞いて、自分も大学生になったんだという実感とともに、少々ドキドキしながら口にするようになる。「チョン語」は単にその類の呼び名にすぎないのかもしれない。「チョン」という侮蔑語との重なりが偶然であるのか、どこかからの引用なのかその起源は明らかではないが、先輩後輩や友人との会話があってこそ使用され、受け継がれてきた言い方だとすると、もしかしたらこのまま消え去る可能性もありうる。

言葉は現実の反映であり、差別の実態が変化する中で、差別用語も変わってきている。単に民族を呼称する「朝鮮」や「朝鮮人」も、侮蔑的な意思と態度でそう呼べば、それは差別語として機能する（侮蔑的な意思や態度がなくても、差別的に使われてきた歴史があることを知っているので、同僚や学生がフラットにこの語を使うときにも、私はイチイチ緊張してしまうのだが……）。差別感情について哲学的にアプローチした中島義道は、最近の学生たちが人を軽蔑する言葉を使用することに敏感であるとしつつ、彼ら・彼女らが過去に使われていた差別語を知らないという事実を発見したときの驚きを記述している。放送禁止用語といった定型的な規制であっても、差別語を次世代に受け継がず死語にしてしまう効果はあったとして評価する。「そういった若い世代が特定の差別語を知ったとしても、彼・彼女にはその語に対するマイナスの語感がない。そうして差別語が差別語ではなくなる」³⁷との可能性を示唆しているが、私はこれに疑いを持っている。差別語で名指される集団に属する人々の記憶（間接的なものも含む）と現実とは乖離がある。「チョン語」を使用する学生の多くは差別感情をもっていないか、「チョン」が差別語であることを知らない。「侮辱の意志」の有無は重要な点ではあるが、本人の意図とは関係なく、傷つく人はいる。そして現在では使われていない言葉だとしても、さらに名指される当事者さえその言葉を知らず、マイナスの語感を持っていなかったとしても、その言葉が侮蔑したり侮辱するために使われていた言葉であるという歴史がある限り、さらには差別的な社会が続いている限り、当事者たちはその歴史と現在という文脈の中でその語を捉え、マイナスの語感に引き寄せられてしまう。加えて言えば、繰り返になるが、「チョン」は今もなお差別語としてこの世に生き続けている。私が出会った学生たちは「その語に対するマイナスの語感がな」かった。しかも「チョン語」を口にする者は消

えつつある。しかし、「それは姿を消したのであって、死んではいない」(池田浩士)。せめて学生たちにはこのような社会を支える共犯者にはなって欲しくない。寝た子はやはり、起こさねばならない。

注

- ¹ 本稿では基本的に言語の名称として「朝鮮語」を使用するが、文脈によっては「韓国語」を用いる。現在の朝鮮民主主義人民共和国および大韓民国で使用されている言語は、前者では「朝鮮語（チョソンマル）」、後者では「韓国語（ハンゲンマル、ハングゴ）」と呼ばれている。英語では「Korean」である。この言語の日本における呼称は多様で、それゆえこの言語を教授する科目名も多様だが、名称問題については後述する。
- ² 日本で唯一の韓国・朝鮮学専門教育研究機関として1925年に設立された天理外国語学校朝鮮語部を受けついで設置された。
- ³ 同じく国立の東京外国語大学（77年に朝鮮語学科開講）では、大学紛争の余波を受け、朝鮮語学科設置は日韓条約締結の延長線上にあり日本政府・企業による朝鮮再侵略の一環だとして設置反対論があった。<http://www.tufs.ac.jp/common/archives/TUFShistory-Korean-5-1.pdf>
- ⁴ 8校の内訳は以下のとおり。駒沢大学、亜細亜大学、桜美林大学、上智大学、大東文化大学、日本大学、国学院大学、愛知大学（桂正淑、2005）。
- ⁵ 2008年度からはテレビが「テレビでハングル講座」、ラジオが「まいにちハングル講座」に名称変更した。さらに2022年4月に「テレビでハングル講座」の放送は終了し、同月から「ハングルっ！ナビ」としてリニューアルして放送している。
- ⁶ 初年度の受験者数は99人。以降、現在まで160-180人で推移している。独立行政法人・大学入試センターウェブサイト「センター試験志願者数・受験者数・平均点の推移」を参照。
- ⁷ 公益財団法人国際文化フォーラムが2009年11月8日に開催した公開フォーラム「日本の韓国語教育30年を振り返って」の記録を参照。http://www.tjf.or.jp/jp/information/2010/inf2010_01.html
- ⁸ 本稿では国立・公立・私立の四年制大学を念頭に置いて議論する。
- ⁹ ここでいう大学とは国立・公立・私立の4年制大学であり、総数は771校である。文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室『平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）』各年度版 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/005.htm
- ¹⁰ 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室『平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）』2015年9月10日、p.7
- ¹¹ 文部科学省『令和2年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）』p.4。同年度調査の大学の母数は775校。
- ¹² このうち政策科学部のみ独自の語学プログラムを採用し、第二外国語に相当する「グローバル言語科目（LGA: Languages for Global Actions）」を設置していた。科目名は「Korean」で2023年から他学部と同様の科目編成になるが、科目名の「Korean」は変更しないようである。
- ¹³ カリキュラムの詳述はしないが、かつては外国語が秋学期から開講されていたり、また、学部によって履修時間数も異なっていた。たとえば週4時間ないし週3時間の初修語を重視するコースと週2時間の英語を重視して初修語の時間数が少ないコースが存在した（週4時間履修する学部は現在も存在する）。ここでいう授業1時間は90分である。
- ¹⁴ 国際文化フォーラム 2005: 37-39。全国の大学ではなく、調査に回答した大学のみの数値である。1995年のデータは韓国教育財団の調査がもとになっている。
- ¹⁵ 南相環 1994: 102-103。南相環によれば、地名、姓名、言語名など分断国家と南北対立に関わる事柄を扱えないという困難が生じたことに加えて、本来文字を現す「ハングル」が音声言語も含むと誤解され「ハングル語」「ハングルでしゃべる」といった言い方も生み出された。
- ¹⁶ 明治大学「文学部の語学教育 朝鮮語」<https://www.meiji.ac.jp/bungaku/tokusyoku/korean.html>

- ¹⁷ 京都大学国際高等教育院「朝鮮語紹介」<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/freshman-guide/language/korean>
- ¹⁸ 立命館大学法学部ウェブサイト「朝鮮語の紹介」<https://www.ritsumeit.ac.jp/acd/cg/law/foreign-guide/korean/about.html>
- ¹⁹ 関西学院大学で朝鮮語を教えていた友人談。関西学院大学も科目名が「朝鮮語」である。
- ²⁰ これらの語はもはや死語と化したと思われたが、現在もヘイト・スピーチのなかで使われている。ヘイト・スピーチとは、人種・民族・国籍・性などのマイノリティに対して向けられる差別的な攻撃を指す（師岡、2013）。日本では2007年前後から社会問題化し始め、2013年からはメディアでも大きく取り上げられるようになった。
- ²¹ 明石書店編集部編 1992: 109-126（梁泰昊論文）。
- ²² 内海愛子他編 1986: 209-226。
- ²³ 同上、227-232。
- ²⁴ 「公（コウ）」はもともと尊敬の意味を表すが、人名などにつけて親しみや軽蔑の意味を表しもある。たとえば犬の「ハチ」をハチ公（ハチコウ）と呼んだり、警察をポリ公（ポリコウ）、先生を先公（センコウ）と呼ぶなど。
- ²⁵ 内海愛子他編 1986: 157-158（鈴木論文）。
- ²⁶ 同上、162-163。
- ²⁷ 同上、171。
- ²⁸ 1970-80年代の不良高校生のあいだで流行した薄い靴のこと。朝鮮学校の（不良）学生が持っていたことからこの名がついたといわれる。
- ²⁹ かかとを潰した上靴（校内専用の靴）のこと。これも朝鮮学校の学生が履いていたことに由来する。
- ³⁰ 内海愛子他編、前掲、166-167。
- ³¹ 同上、175。
- ³² 河明生（かわ・めいせい）は経済学者で企業者史、経営史、マイノリティ問題、韓国地域研究を専門としており、本人が書いたネット小説についてはフィクションであって登場する学校や組織等の団体や個人は、すべて架空の団体および人物であると明言している。60年代に東京都大田区に生まれた「在日韓人2世」として朝鮮初中級学校、朝鮮中高級学校、朝鮮大学と「朝鮮人学校」に通ったこと、中学から高校の間は近隣で有名な不良学生だったことを明らかにしており、小説は当時の体験に基づいた記述であると推測される。
- ³³ 河明生『小説 朝鮮高校物語 - 士官大「天長節」新宿決戦 - 』http://www.jita.jp/kawa/net_story/index.html（2022年7月19日最終閲覧）
- ³⁴ 筆者はTwitterユーザーではないためGoogleでしか検索しなかったが、Twitterを対象に検索すると「チョン語」を明らかに侮蔑語として使用している例が多く見られた。使用の文脈は大別して3つである。1) ネット右翼系の差別的意図をもったつぶやき、2) 大学生などによる授業の略称、3) 差別語だからやめようという呼びかけ。教えてくれた友人に感謝する。
- ³⁵ 落とした単位分を取らねばならないため、春学期と秋学期の両方も履修している学生もいる。したがって、調査に二度回答した学生もいる。
- ³⁶ 沈黙効果とは、アメリカの批判的人種理論の中で提起され、近年のヘイト・スピーチ研究で注目されている概念である。差別的言語を投げつけられた被差別者が、①本人には変えようのない属性を攻撃されることによって言葉を失うこと、②劣位化されているので反論してもその価値が切り下げられて反論が意味をなさなくなる、という状態を指している。
- ³⁷ 中島義道 2015: 185-6。

参考文献

- 明石書店編集部（1992）『新版 朝鮮にかかわる差別表現論』明石書店（初版 1984 年）
- 池田浩士（1985）『差別と言語表現』菅孝行編『いまなぜ差別を問うのか（シリーズ 差別構造を読む 1）』明石書店
- 上原善広（2011）『私家版 差別語辞典』新潮選書
- 内海愛子他編（1986）『朝鮮人差別と言葉』明石書店
- 河明生『小説朝鮮高校物語—士官大「天長節」新宿決戦』第 1 部朝鮮高校青春グラフィティー（http://www.jita.jp/kawa/net_story/2-2.html）
- 小林健治・内海愛子・上村英明（2011）『差別語・不快語〈ウェブ連動式 管理職検定 02〉』にんげん出版
- 桂正淑（2005）「日本における韓国語学習・教育の問題点——韓国語テキストの比較」『文化情報学』第 12 巻第 2 号
- 国際文化フォーラム（2005）『日本の学校における韓国朝鮮語教育：大学等と高等学校の現状と課題』財団法人国際文化フォーラム
- 中島義道（2015）『差別感情の哲学』講談社
- 南相環（1994）「NHK「ハングル講座」の成立過程にかんする研究ノート：日本人の韓国・朝鮮語学習にかんする歴史的研究（その 2）」『金沢大学教養部論集』31
- 師岡康子（2013）『ヘイト・スピーチとは何か』岩波書店
- 文嬉眞・金美淑（2014）「日本の大学機関における「韓国語学習」——愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析（1）」『愛知学院大学論叢』61（4）
- 用語と差別を考えるシンポジウム実行委員会（1981）『差別用語』至文堂

付記

本稿は済州大学在日済州人センター主催「2015 専門家招請シンポジウム「解放 70 年にあたっての在日コリアン問題」」（2015 年 12 月 29-30 日、於：済州大学）での発表「在日朝鮮人に対する差別語を考える—大学という空間から」を大幅に改稿したものである。

謝辞

本学言語教育企画課から朝鮮語受講生数のデータを提供いただいた。記して感謝する。なお、数値は概数で記載した。

